## 第２節　大上古墳群の全容

### １．はじめに

大上遺跡の調査では、大上古墳群に属する古墳３基を部分的にではあるが調査し、古墳群の様相の一端を知ることができた。大上古墳群は、野島稔の命名による（野島 1999）。古墳時代中期～後期を主とした古墳群であるが、これまでにその様相は一部が知られていたにすぎない。ここでは大上古墳群の各古墳を概観し、古墳群の位置付けについても検討したい。

### ２．大上古墳群の構成

**大上１号墳**（野島 1992・四條畷市史編さん委員会編 2016）　大上１号墳は、1992 年度の調査で検出したもので、直径 19.4mと推定される円墳である。墳丘部は平安期に削平されていて、墳丘内に埋葬施設は確認されなかった。幅４ｍの周溝を検出し、墳丘裾部では葺石が検出された。周溝内からは須恵器瑳・高坏・蓋坏・甕、土師器甕、手捏ね土器、鉄製刀子、馬具（バックル）、ガラス小玉 17 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。これらの出土遺物から、古墳時代後期の古墳とみられる。また、周溝内で埋葬施設２基を検出した。

１号埋葬施設は長さ 2.75m、幅 1.2m、深さ 0.6mの長方形で石に囲われていた。埋葬施設内では頭蓋骨・肩甲骨・上腕骨・大腿骨・膝蓋骨・歯など一体分の人骨を検出し、その被葬者の耳付近にあたる位置から金製耳環一対が出土した。また、棺内にあたるとみられる位置から土玉 230 点、鉄製刀子２本、鉄鏃６本が、棺外にあたると思われる位置から土師器壺、須恵器蓋坏が出土した。

２号埋葬施設は１号の北側約 10mの位置で検出し、長さ 1.4m、幅 0.7m、深さ 0.3mで、人頭大と拳大の花崗岩で長方形に囲われていた。その石組み内から人歯とともに碧玉製管玉１点、ガラス小玉 19 点、土玉 30 点、馬歯などが出土した。

**大上２号墳**（四條畷市史編さん委員会編 2016）　1992 年度の調査で古墳の周溝とみられる幅約２ｍ、深さ約 0.5mの溝を検出したものである。溝内から円筒埴輪、鳥形瑳、土師器碗、馬歯などが出土した。円筒埴輪は５個体以上が出土し、出土状況から検出した溝は古墳の周溝で、墳丘上に立て並べられていた円筒埴輪が転落したものとみられる。出土した円筒埴輪は高さ 45～52㎝、口径 26～27.5㎝あり、矢印状のヘラ記号があった。また、この溝から 2.5m離れた位置にも幅約 1.5m、深さ約 0.3mで同方向の溝があり、内部から円筒埴輪が出土した。いずれの溝も同一方向に若干弧を描いており、二重周溝の可能性も考えられるが、調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

**大上３号墳**（村上 2006）　大上３号墳は、1997 年から 2003 年にかけての調査の結果、墳長約 37.5ｍ、周溝を含めた全長約 45m、後円部の直径約 28.6m、前方部長約９ｍの帆立貝形古墳であることを確認した。墳丘は二段築成で、花崗岩の自然石を用いた葺石と、円筒埴輪を伴っていた。周溝内からは円筒埴輪、形象埴輪のほか、須恵器等が出土した。墳丘残存部に主体部は検出できなかった。二段目まで残存しながら主体部が検出できなかったため、横穴系ではなく木棺直葬等も含めた竪穴系の主体部であった可能性がある。

円筒埴輪は立て並べられた位置を保っていた底部片が多くあり、基本的におよそ 10㎝間隔で立て並べられていたことがわかった。出土した埴輪には円筒埴輪のほか、蓋形埴輪や靫形埴輪などがあった。円筒埴輪はタテハケ調整のみのものが多いが、一部にヨコハケを施しているものも存在する。出土埴輪から、川西分類（川西 1978）Ⅳ群からⅤ群に移行する古墳時代後期初頭に築造された古墳とみられる。

**大上４号墳**（野島 1999、四條畷市史編さん委員会編 2016）　1998 年度の調査で周溝の一部を検出した。検出できた周溝の幅５ｍで、くびれ部を確認できたことから前方後円墳であることがわかった。墳丘は削平されていたが後円部径は 24mあり、全長約 40mと推定される。周溝内から、落ち込んだ花崗岩質の葺石や土器類、滑石製臼玉などが出土した。土器類のうち、北側周溝で出土した１点はほぼ完形に復元できる陶質土器壺で、大上３号墳の周溝から出土した土器片と接合した。出土遺物から古墳時代中期末の古墳とみられる。

第 25 図　大上古墳群の古墳位置図

**大上５号墳**（野島 1999、四條畷市史編さん委員会編 2016）　1998 年度の調査で墳形不明であるが横穴式石室を検出したもので、左側壁４石、右側壁１石が原位置を保っており、玄室の幅 1.7m、長さ 3.7mあった。羨道部は破壊されていたが、全長は６ｍほどの石室と考えられる。左側羨道で検出した１石は袖部のもので、左片袖もしくは両袖式とみられ（野島 1999）、発掘時の状況から両袖式と考えられている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。石室内の床面周囲には石組みの排水施設を備え、奥には石敷きの棺床が設けられていた。棺床の位置で鉄釘２本が出土し、木棺を用いたとみられる。副葬品は金銅装中空耳環１、青色ガラス小玉１、緑色凝灰岩質管玉１などがあった。石室内から瓦器碗、土師質土器皿、瓦質羽釜、白磁碗などが出土し、鎌倉時代に盗掘されたとみられる。出土遺物から古墳時代後期の古墳であろう。

**大上６号墳**（本書第３章）　大上６号墳は、2013-1 次調査で検出した古墳である。周溝は幅４ｍ、深さ約 0.6mの規模があった。周溝内からは埴輪が多く出土し、葺石が転落したとみられる拳大～人頭大の花崗岩もいくつか検出した。出土遺物から、古墳時代後期前半の古墳とみられる。しかし検出範囲が狭く古墳の墳形や規模は不明であった。出土埴輪は形象埴輪の器種が多くあり、石見型埴輪、馬形埴輪のほか、人物埴輪や蓋形埴輪の可能性がある破片も出土した。また、円筒埴輪の出土も多く、完形に復元できた個体も存在した。この古墳は埴輪を豊富に使用し、葺石も施す古墳であったとみられる。

**大上７号墳**（本書第４章）　大上７号墳は、周溝の一部を検出したのみで墳形・規模等は不明であったが、一定量の埴輪等の出土遺物があった。出土埴輪から大上６号墳とほぼ同時期の古墳時代後期前半の古墳とみられ、葺石を伴ったかどうかは不明であった。

**大上８号墳**（本書第４章）　大上８号墳は、延長 13.5mにわたって周溝の一部を確認し、直径 16.4ｍの円丘部をもつ古墳であることがわかった。同時に検出した溝３は、この古墳の周溝である周溝２出土遺物と出土した土器が接合し、方向も周溝２と同様に弧を描き平行する。この古墳の二重目の周溝である可能性があり、そうであれば前方後円墳の可能性も考慮されるが、全体を検出できたわけではないため、現時点では不明である。出土遺物はほとんどが土器で、埴輪はごく少量であり、大上７号墳より後出する特徴をもっていた。葺石はないものとみられる。これらの出土遺物からみて、大上８号墳は大上７号墳に後出する古墳時代後期中頃～後半に築造された古墳とみられる。

**大上９号墳**（本書第２章第１節参照）　1994 年度の調査で古墳の周溝の一部を検出した。周溝は北側肩のみの検出で、墳丘部である南側肩は調査区外であったため詳細は不明であるが、周溝の径は 14.2mほどに復元できる。おそらく円墳で墳丘の直径はおよそ 10mほどであろう。

**大上 10 号墳**（野島・村上 1999）　1998 年度に個人住宅の擁壁工事に伴い行なった調査で、古墳の周溝とみられる幅３ｍを超える溝を検出した。調査範囲が狭く古墳の墳形は不明である。この溝からは鉄刀や刀子などが出土した。

**大上 11 号墳**（本書第２章第１節参照）　1999 年度の調査で古墳周溝とみられる溝を検出したものである。周溝内から多量の土器が出土した。そのほとんどは須恵器であり、台付装飾壺、盌、高坏などをはじめ多様な器種があった。古墳の墳形は不明であるが、円墳であるとすれば直径 27m程度に復元できる。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

ここまでがこれまで大上遺跡あるいは大上古墳群に属するものとして認識できた古墳である。このほか周辺での調査で明らかに大上古墳群に属するものとして、次の古墳があげられる。

**大上 12 号墳**（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1995 年度の調査（KMH95-1）で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「南側の古墳」と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺 22mほどの方墳とみられる。確認できた周溝の幅は約７ｍ、深さ約 0.9mであった。墳丘部分は削平されており主体部は検出されなかった。周溝底部に直径約１ｍ、深さ約 0.5mの土坑を確認し、古墳時代中期後半ごろの土師器壺・高坏・甕、韓式系土器甕などが完形で出土した。なかには底部に穿孔のある甕も含まれており、古墳築造に伴い意図的に土器を埋納したとみられる。また周溝内からは、須恵器蓋坏・高坏・甕、韓式系土器甕、土師器甕・高坏、滑石製臼玉・有孔円盤などと、家形埴輪、Ｂ種ヨコハケ（川西 1978）を施す円筒埴輪が出土した。周溝内では人頭大の礫を一定数検出しており、葺石が存在した可能性も考えられる。出土遺物から古墳時代中期後半の古墳とみられる。

**大上 13 号墳**（村上 2000）　四條畷小学校内遺跡の 1996 年度調査で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「西側」の古墳と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺約 15m の規模を測る方墳で、検出できた周溝は幅約３m、深さ約 0.6mであった。東側と南側の周溝で周溝内土坑を検出した。遺物は周溝内から須恵器蓋坏・土師器把手付甕などが出土した。周溝内などで人頭大の花崗岩礫を多く検出しており、葺石が存在した可能性がある。出土遺物から古墳時代後期の古墳とみられる。

**大上 14 号墳**（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1996 年度調査（KMH96-1）で確認した古墳である。『四條畷市史』考古編では「北側の古墳」と記述されている（四條畷市史編さん委員会編 2016）。一辺約 16mの規模を測る方墳で、検出できた周溝は幅約４m、深さ約 0.8mであった。墳丘は奈良時代以降の集落によって削平されていた。周溝内からは須恵器蓋坏・壺などとともに円筒埴輪、鉄斧が出土した。周溝埋没時の上層土層に人頭大程度の礫が多くみられ、葺石が用いられた可能性がある。この古墳の周溝掘削後に、古墳時代後期前半とみられる時期の遺構が掘削されていたことと、出土埴輪の時期からみると、この古墳の築造も古墳時代後期前半にさかのぼる可能性がある。

**大上 15 号墳**（村上 2006）　木間池北方遺跡の 1996 年度調査（KMH96-1）、2003 年度調査（KMH03-1）で確認した。調査・報告時は、南側の旧河川にとりつく「コ」字状の溝と認識されていたが、『四條畷市史』考古編で、それが古墳の周溝を利用した形態である可能性が指摘された（四條畷市史編さん委員会編 2016）。出土遺物に古墳時代のものも多く含まれるため、この指摘は妥当であろう。古墳の規模は一辺 20m程度の方墳であろう。奈良時代に祭祀利用された溝のため、何度か再掘削されており、この溝の周溝としての正確な規模は不明であるが、検出範囲内では、最狭部の幅７mが、周溝幅に最も近い数値であろう。古墳時代の遺物は、須恵器蓋坏・壺・筒形器台、土師器甕・器台・甑・ミニチュア土器、土製当て具のほか、人物埴輪片、鉄斧などが出土した。古墳時代中～後期の古墳であろう。

これ以外に、城遺跡の 1997 年度調査（J097-2）で大上３号墳より東に 300m山側の箇所で検出した旧河川において古墳時代後期の円筒埴輪が出土している（村上 2006）。この円筒埴輪は旧河川出土ではあるが摩耗が少なく、周辺に同時期の古墳が存在した可能性が想定される。

また、この円筒埴輪が出土した箇所よりさらに東に 200m、大上３号墳からは東に 500mほど離れた字黒石とよばれる場所は、現在採土場となっているが、昭和初期の記録によれば土砂採取の際に陶棺が出土し、円筒埴輪も掘り出された古墳（黒石古墳）が存在したという（平尾 1931）。

第１表　大上古墳群の古墳一覧（空欄は未整理）

| 名称 | 墳形 | 規模 | 埴輪 | 葺石 | 時期 | 主な遺物・その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大上１号墳 | 円 | 19.4 | | 有 | 後期 | 刀子・馬具・馬歯。周溝内埋葬２基。 |
| 大上２号墳 | 不明 | 不明 | 有 | | 後期 | 鳥形瑳・馬歯 |
| 大上３号墳 | 帆立貝形 | 37.5 | 有 | 有 | 後期初頭 | 二段築成。形象埴輪。 |
| 大上４号墳 | 前方後円 | (40) | | 有 | 中期末 | 土器類・臼玉 |
| 大上５号墳 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 後期 | 横穴式石室。金環。 |
| 大上６号墳 | 不明 | 不明 | 有 | 有 | 後期前半 | 形象埴輪・臼玉・馬歯 |
| 大上７号墳 | 不明 | 不明 | 有 | 不明 | 後期前半 | 形象埴輪 |
| 大上８号墳 | (円) | 16.4 | 有 | 無 | 後期中～後 | 土器類・馬歯 |
| 大上９号墳 | 円 | (10) | | | | |
| 大上 10 号墳 | 不明 | 不明 | | | | 鉄刀・刀子 |
| 大上 11 号墳 | (円) | 27 | | | 後期 | 土器類 |
| 大上 12 号墳 | 方 | 22 | 有 | 有 | 中期後半 | 家形埴輪 |
| 大上 13 号墳 | 方 | 15 | 無 | 有 | 後期 | 土器類 |
| 大上 14 号墳 | 方 | 16 | 有 | 有 | 後期前半 | 鉄斧 |
| 大上 15 号墳 | 方 | 20 | 不明 | 不明 | 中～後期 | 人物埴輪・鉄斧 |
| (黒石古墳) | 不明 | 不明 | 有 | 不明 | 不明 | 陶棺 |

### ３．大上古墳群の位置付け

上記のように大上古墳群として捉えられる一連の古墳について概観してきた。大上古墳群は合計 15 基（黒石古墳を含めれば 16 基）の古墳から成り、古墳時代中期から後期にかけて築かれた古墳群であることをみてきた。

大上古墳群では、すでに指摘されているように馬歯の出土が多く、馬匹生産を担った人々の墓域であった可能性が考えられている（野島 2008・2009）。上記のように概観しあらためてみると、概要がわかる古墳のうち一定数で馬歯が出土しており、馬具の出土もみられる。このことから、これまでの指摘通り、大上古墳群は清滝古墳群・更良岡山古墳群と並び、馬飼い集団の墓域とみてよいであろう。

大上古墳群および周辺の旧河川等では、石見型埴輪の出土が一定数存在する。石見型埴輪は、朝鮮半島との交渉に深いかかわりをもった地域の古墳に樹立されていることが指摘されている（和田 2006）。大上古墳群は、上記のとおり馬匹生産にこの地域で携わっていた人々の古墳であったと考えられ（野島 2008・2009）、馬匹生産は、朝鮮半島から技術が導入され、半島との交渉を保ちながら行なわれたものであった。大上古墳群の調査でも周溝から馬歯や製塩土器が出土しており、馬飼いとの深いかかわりが想定できる。石見型埴輪の出土からも、大上古墳群が朝鮮半島と交渉をもつ馬飼い集団の墓域とみられることがさらに補強できると言えるだろう。

四條畷市域の馬飼い集落は、河内湖から飯盛山系へと続く標高差のある地形の中で、最低地に馬を陸揚げする港とそれに伴う集落（蔀屋北遺跡・讃良郡条里遺跡）が営まれ、低地の平坦部には水田域（鎌田遺跡・讃良郡条里遺跡）があった。集落（中野遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡・忍ケ丘駅前遺跡）および祭祀域（奈良井遺跡・鎌田遺跡）はやや標高の高くなった平坦地に営まれ、山裾の高所部に墓域である古墳群（清滝古墳群・大上古墳群）が営まれていた。このように大上古墳群は、それ単体で捉えるのではなく、周辺の遺跡も含めて捉え、その性格を把握すべきと言えるだろう。平地の馬匹生産集落に伴う、高所部の墓域と捉えたい。今後も、継続した発掘調査により、大上古墳群の全容のさらなる解明に努めていきたい。

（實盛）